

ご挨拶

これからにつなぐ支援-地域包括ケアとリカバリーの視点-

公益社団法人宮城県精神保健福祉協会

みやぎ心のケアセンター

センター長 小高 晃

東日本大震災から8年以上の時間が過ぎ、震災後9回目の5月、仙台は今年も緑が濃く初夏を思わせる気候が続いている。被災地では災害公営住宅の完成を追って町役場の建て替えが終わり、10年を目処とした復興は外形的には着実に進みつつあるかのように見える。さまざまな会合で「震災の振り返り」という言葉が使われることが幾分か増えたように感じる。

ある会合で「震災の振り返り」という言葉が出た折に、津波に呑まれた病院で奮闘し、今もそこで仕事を続ける方から「振り返りと言いますけれども、私にとって、震災の衝撃と緊張は今も続いています」との言葉が出た。宮城県内で震災時の人口あたり死者が最も多い地区の方々と話していると、「最近になってやっと震災当時のこと話をす中で涙が流れるようになったんです」との言葉を伺う。生活支援・経済支援の縮小も相まって、震災による衝撃と負荷は持続し、むしろ増大することがある。災害公営住宅での自死の報告も続いている。精神保健に関わる回復と支援はむしろこれからが正念場との感がある。

当センターの活動状況や各種調査からは、喪失による悲嘆、生活上の負荷と関連した不安・抑うつ・依存、高齢の方々を中心とした孤立と心身の不調、母子保健と子どもの心身の問題、多様な負荷を抱えた家族の問題などが、大きく浮かび上がってくる。丁寧な支援を続けながら、震災後からの支援のあり方を検証し、今後にどうつなぐかを意識した活動を続けることが課題となっている。

今回の震災をとおして、私どもは、誰しもが困難に向き合うという事実に直面し、厳しい環境の中で人は誰もが悩み、しばしば心身の不健康が起きることを痛感した。また、健康調査などを糸口として、訪問支援を継続することが心身の健康回復や生活支援に有効であること、多様で重層的な対応が子どもから高齢者までに必要であること、支援者間の連携の意義、人と人とのつながり・生活基盤・心の健康に関する理解の推進・ネットワーク・相談体制などが重要であることを学んだ。さらには地域精神保健福祉活動の基本やケアマネジメントの方法が、平時にも災害時にも有効であることを確認した。

少子高齢化、人口減少、支援力の低下などの厳しい環境の到来に向けて、統合的で効率的な支援を目指す地域包括ケアの理念がさまざまな場で提唱されているが、その具現化については今後の課題である。さまざまな問題を抱える被災地こそが、こうした課題に率先して向き合い取り組んできたこの時代の先進地とも言える。震災後積み重ねた多様な支援のエッセンスは今後につながり生きるはずである。さまざまな困難に向き合ってきた国々が選んだのは「人は皆、災害・病気・障害・経済問題などのさまざまな困難に向き合う。共に生活と心の回復に向けて力を出し合い助け合う社会を目指そう」という精神保健のリカバリーの理念であった。震災を経た私どもの故郷みやぎが安心と希望の地として蘇ることを願い、日々の活動を地域包括ケアとリカバリーの視点から検証し、今後につないで行きたいと思う。日頃のご支援ありがとうございます。皆様のご指導・ご鞭撻を引き続きお願ひいたします。